
けいおん IFストーリー 霧と憂の恋物語

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん IFストーリー 霧と憂の恋物語

【Nコード】

N9615N

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

憂と霧夜の恋物語です。本編に挟めるのは少しアレだったんで、こっちで本格的にやります。もちろん、けいおんメンバーやオリキヤラたちも出ます。本編と同時進行で頑張ります。

プロローグ（前書き）

六甲水「霧夜と憂の恋物語です。」

雪那「俺達の話も一緒に進められるのかよ」

六甲水「大丈夫。頑張ります。」

心「もしかして、こっちで、私達のキャラ設定やるの?」

六甲水「いや、もう少し小説が一段落してから、別の作品として、お二人の話やりますよ」

プロローグ

プロローグ

それは、幼い頃の記憶。従姉妹の子が公園で泣きじゃくっていた。俺は何故泣いているのか聞いた。

少女「お母さんが大切にしていたもの壊しちゃったの。」

霧夜「……正直に謝れば怒らないと思っぞ」

少女「でも、私きつと捨てられる」

霧夜「じゃあ、ごうしよう。俺が遊んでいて、落としちゃったって、それなら、……は怒られないだろう」

少女「でも、霧くんは怒られる」

霧夜「大丈夫。怒られ慣れてるから」

少女「いいの？」

霧夜「ああ、」

その後、謝りに行った俺だが、少女の母親は怪我をしていないか心配しただけで怒られなかった。

プロローグ（後書き）

霧夜「なあ、この少女って憂じゃないのか？」

六甲水「さあ、過去の話だから覚えてない部分がありますからね」

梓「何かの伏線？」

六甲水「そんなところ」

雪那「いいから、俺達の話進めろよ」

第1話 平沢姉妹との再会（前書き）

六甲水「平沢姉妹との再会シーンですね」

雪那「話的にはまだ春休みの最中か？」

六甲水「まあ、そうだな。基本的には霧夜視点かな。たまに憂視点」

第1話 平沢姉妹との再会

第1話 平沢姉妹との再会

春休み、俺はとある駅の前で待っていた。つい先日、第1志望校の桜ヶ丘高校の試験に合格し、桜が丘高校に通っている従姉妹の所で住み込むことになった。

「……遅いな。」

今の時間は午後3時。待ち合わせの時間は2時、一時間の遅刻だ。

「メールしてみるか。でもな、」

すると、向かいの道から待ち合わせをしていた人物が走ってきた。

「憂い〜、待ってよ」

「ほら、お姉ちゃん急いで」

「憂、唯姉さん。遅かったけど、どうしたんだ？」

この少女たちは、これからお世話になる従姉妹の平沢姉妹。セミロングの方は一つ上の姉、平沢唯。いつも明るく、天然の少女だが、小さい頃から引っ張りまわされ、少し苦手意識がある。ポニーテールの方は同じ年の平沢憂。唯姉さんの世話をいつも行っている。

「ごめんね。やっくん。本当はもっと早く来たかったんだけど、」

「今度は何？うっかりお昼寝してたとかか？」

「実は、お姉ちゃん。ギターの練習してて、向かいに行くのが遅れちゃったんだ」

「ギターって、そういえば、始めたんだっけ」

「うん、お姉ちゃんの演奏上手なんだよ」

「機会があつたら聞かせてあげるね」

唯姉さんは嬉しそう言った。本当に誰かに聞かせたいんだな。それにしても新しい生活か。一体どんな事になるんだか

第1話 平沢姉妹との再会（後書き）

六甲水「義亮が女装したり、義亮が女装したりするぜ」

義亮「思い出させるなアアアアア」

霧夜「次の話は、本編の俺と雪那が友達になる話か？」

六甲水「まだかな。次は入学式が始まる前の日です」

義亮「憂との関係が接近するのか？」

第2話ある日の午後（前書き）

六甲水「今回は入学式前の話です。一人留守番をしている霧夜の話です」

雪那「憂とか出るのか？」

六甲水「さあ、それはどうでしょう。ついでに梓編が終わったから、こっちも本腰入れますから、」

梓「また私達みたいなことをやるの？」

六甲水「うーん、どうだろうね。」

雪那「心配だ。」

第2話ある日の午後

第2話 ある日の午後

入学式前日の午後、昼近くまで寝ていて起きてリビングに行くところ、テーブルの上に書置きが残っていた。

『お姉ちゃんと一緒に買い物に行ってきます。お留守番よろしくね。by憂』

といった書置きが残されていた。

霧夜「買い物か。俺も早く明日の準備をしなきゃな。」

とりあえず、冷蔵庫の中をあさり、適当にご飯を食べて、部屋に戻って、部屋の片付けや明日の準備をすることにした。

霧夜「制服は……これか。それにしても、高校生か。勉強とかも心配だけど、一番心配なのは唯姉さんに強制的に入部されないようにしなきゃ」

しばらく荷物を片付けしていると、ふっと、窓から外の様子をみるとポツリポツリと雨が振ってきた。

霧夜「そういえば、憂の奴。洗濯物干しっぱなしだな。取り込むか」
ベランダに干してある洗濯物を取り込もうとした瞬間、ある物に気がついた。それは……

霧夜「やばい、憂と唯姉さんの下着が……、」

真っ白な下着が干してあった。

霧夜「どうする。取り込まないと下着が濡れちまうし、もし取り込んでいる姿を近所の人に見られたら変態扱いされるし、どうしよう」
意を決して、取り込むことにした。あんまり下着を見ないようしながら取り込むことに成功した。すると、いきなり呼び鈴が鳴った。

霧夜「誰だ？宅配便か。」

洗濯物をリビングに置いて、そのまま玄関の方に向かい、扉を開けると、そこには黒髪の少女がいた。

漣「よっ、ゆ、い？」

霧夜「あっ、あの、どちら様ですか？」

漣「いや、君こそ、誰なんだ？もしかして、泥棒？」

霧夜「い、いや、違います。というか、携帯取り出して電話しよう
としないでください。」

唯「あれ？漣ちゃんだ。」

憂「いらっしやい。」

丁度良く、唯姉さんと憂が帰ってきた。それを見て、黒髪の少女が唯姉さんに詰め寄った。

漣「唯、ど、泥棒。」

唯「泥棒？もしかして、やっくんのこと？」

漣「へっ、知り合い？」

唯姉さんと憂が事情を説明した。すると、漣と呼ばれている少女が安堵していた。

漣「何だ。従兄弟だったんだ。悪かったな。泥棒呼ばわりして、」

霧夜「いや、別にいいですよ。」

唯「あつ、まだ紹介して無かったね。こちら、けいおん部の友達の秋山漣ちゃん」

漣「よろしくな。えっと、」

霧夜「真堂霧夜です。」

唯「私はやっくんって呼んでるんだよ。」

漣「私は普通に霧夜って呼ぶよ。ここに住んでるといって桜ヶ丘に入学するのか？」

霧夜「はい、今年から共学になって、」

唯「憂と同じクラスだったらいいよね。」

霧夜「ん、まあね。」

憂「そういえば、どうして、漣さんは霧くんの事泥棒って思ったんですか？」

漣「いや、女性しかいない家なのに男がいて、さらにその、目付きが悪くってつい、」

唯「あはは、やっくんは昔から目付き悪いもんね」

霧夜「あんまり言わないでくれ。気にしてるんだから」

漣「ごめん。気にしてたんだ。」

憂「でも、霧くん。カッコいいよね。」

憂の言葉を聞いて、少し嬉しくなった。子供の頃からいつも俺のこ
とを気にかけてくれる。なんだろう憂の事を思うと何だか心がおか
しくなりそうだった。

第2話ある日の午後（後書き）

六甲水「霧夜くんに質問。憂と唯の下着はどうでした？」

霧夜「何でそんな事を聞くんだよ」

六甲水「実際、女の子の下着を触るなんて滅多なことじゃないからね。で、どうでした。」

霧夜「ま、まあ、あんまり目に見ないように別の服と一緒に包んだから分らない」

六甲水「ちっ、匂いぐらいは嗅いだらどうだ。」

雪那「捕まるからな。」

六甲水「そういう雪那はどうなんですか？小雪ちゃんの下着とかは」

雪那「いや、普通に取り込んでるけど、」

小雪「雪兄はあんまり意識してないもんね。梓お義姉ちゃんは どう思う？」

梓「さすがに恥じらいぐらいは……」

六甲水「とりあえず、次回は、入学式と雪那と霧夜が友達になる話を飛ばして、スポーツ大会をやりませう」

第3話 スポーツ大会の練習（前書き）

六甲水「今回はスポーツ大会です。」

霧夜「そもそもスポーツ大会なんてあるのか？」

六甲水「普通に俺の高校でありましたよ。」

雪那「何の競技をやるんだ？」

六甲水「それはあとのお楽しみ。」

第3話 スポーツ大会の練習

第3話 スポーツ大会の練習

五月、桜ヶ丘に入学してもう一ヶ月が過ぎようとしている。そんな中とある行事が行われようとしている。

霧夜「スポーツ大会ねえ」

雪那「まためんどくさいことを……」

義亮「それも一番めんどくさいのが、男子はハンデとして、腕と足に錘をつけるとか、めんどくさいことを」

俺は入学してすぐ仲良くなったクラスメイトの霧生雪那と沢渡義亮と今度行われるスポーツ大会の話をしていた。今年なって初めてスポーツ大会を始めるらしい。

霧夜「とりあえず、俺達が参加するのは……バスケか。」

雪那「そっぴや、光真の奴張り切ってたぞ。絶対に一番を取るって、」

義亮「練習とかめんどくさいぞ」

三人で話していると憂の他に中野梓と鈴木純が話しかけてきた。

純「何？スポーツ大会の話？」

義亮「そう、俺達はバスケットだっさ」

雪那「まだ外の競技の方が良かったよ。雨が降ったら中止になるのに、何で屋内での競技なんだ」

梓「ゆきは運動神経いいんだから、別にいいんじゃない?」

雪那「運動するのがめんどくさいんだよ」

霧夜「三人は何に出るんだ?」

憂「わたしたちもバスケットだよ。」

霧夜「そうなんだ。じゃあ、今日は一緒に練習か?」

憂「うん」

そして、体育の時間。俺と憂と雪那と中野と義亮と鈴木の六人で軽くバスケの試合をすることになった。

純「とりあえず、チームはどうする?」

義亮「ジャンケンで決めるか。」

義亮の意見でジャンケンをし、チームが別れた。

Aチーム 中野 雪那 憂

Bチーム 俺 義亮 鈴木

雪那「俺は男子一人か」

義亮「ちょうどいいハンデだろ。」

純「ハンデって?」

義亮「見てれば分かるよ。それじゃあ、開始」

最初、ジャンプボールから始まった。俺と憂でやることに、ボールが上がったと同時に二人で飛び、俺がぎりぎりのところでボールに触れ、こちらのボールになり、鈴木に渡った。

純「よし、このまま、一気に……」

義亮「気をつける。雪那が……」

純「へっ、」

気づくと鈴木が持っていたボールがいつの間にか雪那が持っており、一気に3ポイントを取った。

梓「ゆき、凄い」

霧夜「あいつ、凄すぎだろ」

義亮「あいつ、普段は運動をやる気がないが、こついう時は率先してやるんだよ。気をつける。かなり強いから」

雪那「止められると思うのか?義亮」

義亮「ふん、お前をいつも止めてたのは誰だろうな」

二人して何故か挑発をしていた。というかこれはいつからスポーツ漫画に……

今度は憂にボールが渡り、俺は正面に回り、ボールを奪おうとして手を伸ばそうとしたが、

むにゅ。

と明らかにボールの感触とは違う感触だった。よくみると俺の手はボールではなく、憂の胸に触れていた。

憂「あつ、」

霧夜「あつ、」

お互い顔を真赤にしていた。するとボールが横から飛んできて、顔に当たった。

霧夜「くは、」

義亮「何、体育の時間にセクハラしてるんだよ」

霧夜「じ、事故だ」

雪那「とりあえず、二人ともすぐに続けられそうにないから、休憩にしようぜ」

梓「うん」

こうして、今日の練習は終わった。

第3話 スポーツ大会の練習（後書き）

六甲水「霧夜くんに質問。憂の胸の感触はどうでした？」

霧夜「真面目に答えたらどうなるんだ？」

六甲水「処刑しますから」

雪那「作者、羨ましいんだな。」

梓「うん、」

霧夜「というか、事故だろ。」

六甲水「まあ、一度やってみたかったので、本当は梓編でやりたかったけど、」

梓「やめてよ。」

六甲水「次回はスポーツ大会本番」

第4話 スポーツ大会（前書き）

六甲水「憂の胸を触った次の日です。」

雪那「というか、憂の胸触った後の霧夜と憂はどんな感じだったのか？」

六甲水「顔を合わせるたびに顔を真赤にしていたよ」

雪那「どうするんだか。スポーツ大会」

第4話 スポーツ大会

第4話 スポーツ大会

スポーツ大会当日、俺はあることについて悩んでいた。それは、少し前の日に、バスケの練習中、憂の胸を触ってしまうという事故を起こしてしまった。それ以来、憂と顔を合わすたびにお互い顔を真赤にしている。

霧夜「はあ、どうしよう。」

教室でため息を付いた俺を心配してか、雪那が声をかけてきた

雪那「どうした？キリ。溜息なんかついて」

霧夜「いや、ちょっとな。」

雪那「どうせ、憂の胸を触ったことでも気にしてるのか？」

霧夜「何で、分かるんだよ。」

雪那「分かるよ。お前がここ最近様子がおかしいのはあの時の体育からだ。」

たまに雪那は鋭いところがあるんだけど、何で中野の気持ちに気づいてないんだ？

光真「こら、お前ら、そろそろ競技が始まるぞ。」

メガネを掛けた男が声をかけてきた。名前は久流光真。このクラスにいる男子メンバーのまとめ役。

雪那「そういえば、メンバーはどうなるんだ？」

光真「メンバーは、3ON3でやるから、男子メンバーと女子の三人が別れてだ。Aチームは俺、平沢、霧夜だ。Bチームは雪那、郁斗、中野だ。Cチームは心、義亮、鈴木の3つのチームだ。とりあえず、一回戦はAチーム対Cチームだ」

雪那「Bチームは？」

光真「Bチームは二年生と試合だ」

そして、試合が始まった。

始まって五分後、すぐに点差が広がった。Cチームの心と義亮の活躍で点がすぐに入った。

霧夜「つ、強すぎだろ。」

心「えへへ、勉強はできないけど、運動は得意なんだよ」

心がボールを持ち、そのまま、またゴールに向かったが、憂が止めようとしたが心の足が引っかかり、二人同時に転んだ。

心「つう、」

憂「いたたー」

二人とも足を押さえていた。多分ぶつかったときに足を捻ったのだろつ。

光真「これじゃあ、試合はできないな。保健室に行くぞ」

霧夜「あつ、憂は俺が運ぶよ」

憂「あつ、大丈夫だよ。一人でいけるから」

霧夜「あんま無理すんな。」

そう言つて、俺は憂をお姫様だっこすると、憂は少し恥ずかしそうにしていた。

憂「あの、やっぱり普通におんぶとかで」

霧夜「だ、大丈夫だよ。」

心「いいなあ〜、郁くん。私を……」

光真「いや、あいつは試合中だ。というか、普通に歩けよ」

心「うう〜」

第4話 スポーツ大会（後書き）

六甲水「霧夜くんに質問です。」

霧夜「答えない。」

六甲水「答えないと処刑します」

霧夜「答えたら？」

六甲水「処刑します」

霧夜「おかしいよね。どっち選んでも処刑されるじゃん。」

六甲水「ここ最近、憂と美味しい展開をしてるから、むか、羨ましいんだよ」

霧夜「むかついてっていったる。」

小雪「ねえ、私の出番は？」

六甲水「あとで出ますよ」

第5話 霧と雪（前書き）

六甲水「今回は、ある休日でのやり取りです。」

霧夜「俺と雪那しか出ないのか？」

六甲水「ちゃんと憂とかも出ますよ」

雪那「何をやらされるんだか」

第5話 霧と雪

第5話 霧と雪

ある日の休日、俺は、友達のスネと一緒にファーストフードにいた。

スネ「なあ、お前、中野のことどう思ってるんだ？」

スネ「はあ、いきなりなんだよ。」

スネ「いや別に……」

スネ「別について、気になるだろ。」

スネ「いや、ただ、お前ら仲がいいから。」

スネ「……まあ、あいつとは幼なじみだし、それに、す、好きなのかな」

スネは真っ赤にしながら言った。

スネ「そういうお前はどなんだよ。」

スネ「ん、どうって？」

スネ「お前、憂と唯先輩と一緒に住んで、それに結構憂といい雰囲気じゃん。憂の事意識してるんだろ」

スネ「うっ、まあ、好きだけど、あいつ、俺のことどう思ってるん

憂は珍しく大声を出した。周りの席の人もこっちを注目してきた。するとこっちにゆきと霧夜くんが近づいた。

梓「あれ？二人ともどうしたの？」

雪那「憂の大声が聞こえて、よく見たら、ここにいるからな。」

梓「二人して、遊び？」

雪那「そんなところ、てか、キリ。顔が赤いぞ」

霧夜「気のせいだ」

梓「憂も顔が赤いよ」

憂「気のせいだよ」

二人して、顔を真赤にしている。何と云うか似たもの同士だな

霧夜 side

その後、中野と雪那と別れ、憂と一緒に家まで帰る途中だ。

憂「遅くなっちゃってね」

霧夜「そうだな。唯姉さん、お腹すかせて待ってるかも」

憂「そうだね。」

他愛のない会話だったが、二人でずっと顔を真赤にしていた。中野もおんなじ話をしていたのか。すると、憂と俺の手が一瞬触れ合った。

憂「あっ、」

霧夜「あっ、」

二人して、顔を見合わせて、そして、憂が笑顔で言った。

憂「折角だから、子供の頃みたく手をつないで帰ろっか」

霧夜「う、うん」

こうして、二人で手をつないで帰ることになったのだった。

第5話 霧と雪（後書き）

六甲水「ほんとうに二人は仲がいいね」

雪那「本当に、俺なんかつい最近だぞ。手をつないだの」

義亮「というか、まだ告白してないのか？霧夜は」

霧夜「そんな事できるか。ただでさえ、ギクシャクしてるのに」

雪那「いいじゃん、告白すれば一気にすっきりするから」

義亮「こいつは、本当に変わったな。所で、次の話は？」

作者「次は小雪ちゃんが登場。話的には、まだ夏前だから」

第6話 憂の恋心（前書き）

六甲水「今回は、憂ちゃんと小雪ちゃんが登場です」

霧夜「俺は？」

六甲水「今回は出ません」

第6話 憂の恋心

第6話 憂の恋心

買い物帰り、私は買い物袋を持って、家に帰る途中だった。だがずっと、あることに思い悩んでいた。

憂「はあ、ここ最近、霧くんの事考えてるなあ、」

一緒に住んでいる従兄弟の霧くんとは、ずっと顔を合わせることが出来ていない。

憂「やっぱり、あの時のスポーツ大会の時からかな。」

小雪「何が？」

突然、後ろから声をかけられた。振り向くとそこには雪那くんの妹の小雪ちゃんがいた。

憂「小雪ちゃんこんなところでどうしたの？」

小雪「んー、桜ヶ丘にいる先輩のところ。」

憂「そうなんだ。誰なのその先輩って」

小雪「心さん。私の先輩なんだ。」

憂「へえー、」

小雪「所で、憂姉は何か悩み事？」

憂「えっ？」

小雪「ちゃんも意外と鋭い人だな。私は近くの公園のベンチに座り、小雪ちゃんに話した。」

小雪「ふーん、そうなんだ。それにしても、こっちでも恋愛関係か。本当にすごいね。高校って」

憂「それで、ずっと、顔合わせることが出来ないの。どうすればいいかな」

小雪「普通に接したら？雪兄も梓姉といい感じだけど、普通に接してるよ」

憂「あの二人が少し羨ましいよ。」

小雪「だったら、今度二人でまたどっか出かけたなら？今度はデートって目的で」

憂「うん、そうしてみるよ」

家に帰り、私は部屋にいる霧くんを尋ねた。

憂「ちよつといいかな？」

霧夜「別にいいけど……どうしたんだ？」

霧くんも私と話しているときは少し顔が赤くなったり、ちゃんと顔を見てくれない。

憂「その、ね。今度、どっかあそびにいかいない？」

霧夜「遊びつて、二人で？」

憂「う、うん。どうかな」

霧夜「いいかもな。一緒に行くか」

憂「うん」

小雪side

霧生家

小雪「という訳で、私は二人のデートを観に行きます。」

雪那「いや、ジャマするなよ」

小雪「えへへ、いいじゃん。ついでに梓姉も誘おうと」

雪那「はあ、お前に何言っても、しょうがないよな」

第6話 憂の恋心（後書き）

六甲水「次回、霧夜と憂のデートです。」

小雪「楽しみだな。二人のデート」

雪那「あんまり無茶するなよ」

小雪「大丈夫。こつそりみるから」

雪那「はあ、」

六甲水「感想お待ちしてまーす」

第7話 デートと追跡（前書き）

六甲水「今回は霧夜くんと憂のデートです」

小雪「私がお二人のあとを追跡します」

雪那「あんまり無茶するなよ」

小雪「何言ってるの？雪兄も行くんだよ」

雪那「まじかよ」

第7話 デートと追跡

第7話 デートと追跡

休日、俺は駅にいた。理由は憂とデートをすることになったからだ。約束の時間は10時、今は9時55分。あと五分で約束の時間になる。すると、憂が向かいの道からやってきた。

憂「おまたせー、」

霧夜「おう、」

憂「結構待たせちゃったかな？」

霧夜「いや、そんなに待ってないよ。というか、一緒に出ればよかったんじゃない」

憂「それじゃあ、デートの意味が無いよ。」

霧夜「ん、そうだな。」

憂「それじゃあ、行こうか」

二人で一緒に歩いて何処かへ向かった。そして、俺達の後ろの方には……

小雪「もう、普通なら憂姉の服を褒めるんだよ霧兄」

唯「うんうん、二人ともお似合いだね」

律「おつ、二人とも曲がったぞ、私達の行くぞ」

雪那「何で、唯先輩と律先輩がいるんだよ」

律「おもしろうそうだから付いて来た。」

唯「姉として、二人のデートの行方を見に」

小雪「ちゃっかり雪兄も付いて来てるしね」

雪那「お前が誘ってきたんだろ。」

小雪「ほら、行くよ」

俺はため息を付き、二人のあとを追うことにした。

俺と憂は近くの商店街にあるファッションショップに入った。

霧夜「何で服屋なんだ？」

憂「うーん、せっかくだから霧くん服を選んでもらおうと思って……だめかな？」

霧夜「いや、いいぜ。」

俺はとりあえず、憂に似合いそうな服を探していると、水色のワンピースとピンクの花柄のエプロンを選んだ。

霧夜「これじゃだめかな？」

「
憂「ううん、いいよ。私は霧くんが選んだものなら何でもいいもん。」

霧夜「そ、そうか。」

律「ほう、いい雰囲気になったな」

小雪「このままキスかな」

唯「私もやっくんを選んでもらおうかな？」

雪那「はあ、帰ろうかな」

梓「あれ？先輩方なにしてるんですか？」

後ろから声をかけられ振り向いてみると、梓がいた。

小雪「こんにちわ。梓姉。こんなところでどうしたの？」

梓「ちょっと、服を買いに」

律「じゃあ、雪那。お前もあの二人のように服選んでやれよ」

雪那「はあ、まあ、いいか。」

梓「えっ、うん。」

俺と憂が一緒に会計を済ませようとするところに中野と雪那と出くわした。

梓「あれ？憂達もいたんだ」

憂「梓ちゃん。それに雪那くん。こんにちわ。こんな所で偶然だね」

梓「うん。」

ちなみに梓にはさっき口止めという理由で、服を何着買ってあげた。

霧夜「お前らもデートか？」

雪那「ん、まあ、」

憂「折角だから一緒に行こうか。」

雪那&霧夜「なに？」

梓「ダブルデート」

第7話 デートと追跡（後書き）

六甲水「突然のダブルデート。」

霧夜「まさかこんな事に……」

小雪「私達もあとを追跡します」

第8話 ダブルデート（前書き）

六甲水「まさかのダブルデート」

霧夜「というか、時間軸的にまだ雪那と梓はお互いを意識し始めるところだろ。」

六甲水「そう、だから、初々しい二人が……」

小雪「あつ、唯姉、この双眼鏡とかもいいね」

唯「おお、この帽子探偵みたい」

律「よし、気合入れて追跡だアアア」

雪那「どうなるんだか」

第8話 ダブルデート

第8話 ダブルデート

偶然会った雪那と中野と共にとある公園にいた。

憂「広いねえ、」

霧夜「そうだな。」

梓（この二人、仲がいいな。それに手を普通につないでるし、私もゆきと……）

雪那（はあ、何でこんな事になったんだか。それにしても、まさか俺もデートするハメになるとは……）

何故か雪那と中野は顔が真っ赤になっていた。そういえば、いつの間にか憂と手をつないでるけど、何だかだんだん恥ずかしくなってきた。

憂「ほら、早く行こう」

それにしても、憂ってこんな積極的だっけ？いつもなら「どうしたの？」とか聞いてくるはずだが…よく見ると憂の顔が真っ赤になっている。まさか、テンパリ過ぎておかしくなってるな。

そして、別の場所では……

律「ほう、霧夜と憂ちゃんは普通に手をつないでるな」

唯「二人とも仲がいいな。私もあの人と……」

小雪「もう、雪兄は奥手なんだから、ここは一気に手をつなぐなりしなよ」

雪那（絶対にあそこの茂みでこっちの様子見てるな。こゆ達）

梓「ねえ、ゆき。いつの間にか二人ともいないよ」

雪那「うお、マジだ。どこ行ったんだ？」

梓「探そっか」

いつの間にか二人つきりになってしまった俺と憂、やばいまた意識し始めたら恥ずかしくなってきた。

憂「どうしたの？顔が赤いけど」

霧夜「い、いや、気のせいだ。憂だって顔が赤いぞ」

憂「えっ、そ、そうかな。」

いつの間にか見つめ合っている俺と憂。何だこの展開は……

憂「霧くん。あのね、」

霧夜「な、何だ。」

憂「わ、私ね。霧くんの事……」

霧夜「へっ、」

だんだんと顔が近づいてきているまさか、このまま、キスを……

唯「へっくしょん」

その時、どこからとも無く、くしゃみが聞こえた。そのおかげで理性が強制的に戻された。

憂「誰だろうね。」

霧夜「さあ？ だけど、寒くなってきたから帰ろっか」

憂「うん、そのまえに二人合流しよう」

霧夜「ああ、」

少しもつたいなかった気がしたが、まだこつという関係も悪くないか

第8話 ダブルデート（後書き）

律「まったく、あんな所くしゃみなんかして」

唯「だって、寒かったんだもん」

小雪「もう、あと少し、キスが出来たのに」

六甲水「君たち、霧夜にバレないようにね」

雪那「というか、焦らしまくりだなキリ」 奥手のせいで皆に迷惑を掛けた男

梓「そうだね、私達みたいに早く恋人同士になればいいのに」 勘違いとスレ違いでみんなに迷惑を掛けた女

雪那&梓「って、何さっきの」

六甲水「気のせいでしょ、」

小雪「ところで、唯姉のセリフにあったあの人って？」

唯「えっ、だ、誰のことだろうね」

六甲水「とりあえず、唯編の伏線です」

律「私の話は？ 澪とか書いてるのに」

六甲水「多分、気合があれば描くかもしれない」

雪那「自信がないな」

小雪「次回は再び勉強会です。」

梓「というと、私の時の次の日の話？」

小雪「そうらしいよ。まあ、メインは憂姉と霧兄だけだね」

第9話 再び勉強会（前書き）

六甲水「梓編の勉強会の次の日です。」

霧夜「この時も憂はあんまり恥ずかしがってなかったな」

義亮「ノートに集中してたからじゃね」

雪那「そうかも。」

第9話 再び勉強会

第9話 再び勉強会

ある休日、俺と中野と憂とで、雪那の家に来ていた。理由は、昨日の勉強会の続きをやるからだ。ちなみに、鈴木と綺月と葉渡と義亮の四人は用事があり、来られない。

中野がインターホンを押すと出てきたのは、小雪ちゃんだった。

小雪「こんにちわ。」

梓「あれ？ゆきは？」

小雪「雪兄はジャンケンで負けて、今コンビニだよ」

梓「そうなんだ。」

小雪「でも、雪兄遅いなあ、」

梓「じゃあ、私向かいに行ってくるね」

小雪「じゃあ、私も行きますね。憂姉、霧兄、留守番お願いできます？」

霧夜「ああ、リビング勝手に使わせてもらっぞ」

小雪「どっぞ、」

雪那の家のリビングに上がり、憂とともに勉強を始めたが、何だかギクシャクしてきた。

憂「あれ？ここ間違ってるよ」

霧夜「えっ、どこ？」

俺がノートを覗き込むと、ふいにオデコにキスをされた。

霧夜「へっ、」

憂「えへへ、キスしちゃった。」

憂、お前何時からそんな積極的に……すると憂が俺の手を握ってきた。

憂「私ね。霧くんの事好きだよ。霧くんは？」

霧夜「へっ、お、俺も、憂のことが好きだよ。」

憂「それじゃあ、両思いだね。」

俺と憂は唇を重ねようとした。だが、

小雪「ただいまー」

小雪ちゃん達が帰ってきた。とっさに離れる俺と憂。

小雪「ごめんね。遅くなって」

憂「あ、あ、大丈夫だよ」

霧夜「そ、そういえば、中野と雪那は？」

小雪「ん、あえて二人つきりにさせたんだけど、もしかして、お邪魔でした？」

霧夜「い、いや、別に」

憂「う、うん」

小雪（この反応。ふーん、もうくつついたんだ。あとは雪兄と梓姉だね）

こうして、俺達は恋人同士になった。

第9話 再び勉強会（後書き）

六甲水「やっとくつついた」

雪那「まだ終わりじゃないんだな」

六甲水「うん、とりあえず、キスできるまで頑張るから。」

梓「何時ぐらいにするの？」

六甲水「うーん、学祭の後かな。ちよくちよく、お二人の関係を書きますから」

雪那「俺と梓が喧嘩してるところの話とかか？」

六甲水「そうそう、その時、二人はとかね」

第10話 ある秋の日（前書き）

六甲水「今回は、梓が雪那から逃げていった時の話です」

雪那「それじゃあ、俺と梓は結構辛い思い出だな」

梓「そうだね」

第10話 ある秋の日

第10話 ある秋の日

とある日、俺と憂は一緒に帰っていた

霧夜「寒くなったな」

憂「そうだね、」

霧夜「唯姉さんに風邪引かないようにいわなきゃな」

憂「うん、お姉ちゃん、気をつけないと風邪引いちゃうからね。」

二人でそんな話を話しながら曲がり角を曲がると憂が誰かとぶつかった。

憂「きゃ、」

ぶつかった相手は……泣き顔の中野だった。

憂「あ、梓ちゃん、どうしたの?」

梓「う、憂。うああああああん」

いきなり、中野が泣き出し、憂に抱きついた。

憂「あ、梓ちゃん。落ち着いて、」

霧夜「と、とりあえず、家に」

中野を家に連れていき、憂が落ち着かせた。俺は、どうせなら女子同士の方がいいと思い、自分の部屋に戻った。そして、しばらくして、中野が帰った。

霧夜「憂、中野どうしたんだ？」

憂「うん、実は……」

憂の口から雪那が知らない少女と一緒に腕を組みながら歩いている所を見たと言うことだった。

霧夜「雪那が？あいつに中野一筋じゃなかったけ？」

憂「うん、多分誤解何だと思うけど、梓ちゃん落ち込んで」

霧夜「とりあえず、この話は知らないということで明日、様子見てみよう」

憂「うん」

そして、次の日、学校に行ってみると中野と雪那の仲が確かに悪くなっていった。そして、数日後、小雪ちゃんから真相を聞き、皆が帰ったあと俺と憂とでベランダで話していた。

霧夜「あいつら、大丈夫かな」

憂「心配だよね。梓ちゃんと雪那くん。あんなに仲よかったのに…」

霧夜「何とかしてあげたな」

憂「うん」

第10話 ある秋の日（後書き）

六甲水「第10話でした。」

梓「……」「ごめんね。あんなこと言って」

雪那「い、いや、俺は気にして無いよ」

梓「ゆ、ゆき」

霧夜「あそこでラブリ始めたぞ」

憂「あの頃とは違うね」

六甲水「それと、この前、二人がキスをしたら終わりっていったじやないですか。それに新霧憂編をやるって」

霧夜「ああ、」

憂「そうですね」

六甲水「何か、このままやっちゃったほうがいいかな。学祭でキスをして終わりじゃ無くって、唯たちが卒業して、キスをしてから終わりって感じで」

霧夜「そうしたければそうすれば」

第11話 学園祭の告白（前書き）

六甲水「雪那の学祭での告白から始めます」

雪那「やめてくれ。今でもかなりきついんだぞ」

梓「でも、その後二人で……きゃ」

雪那「梓、お前まじで性格変わってないか？」

六甲水「そういう雪那だって、結構変わってるからね。まるで、某アニメの主人公は最初、ガンダム大好きすぎて皆に迷惑掛けてたのに、二期だと仲間を信じて戦うキャラに」

雪那「何の話だよ」

第11話 学園祭の告白

第11話 学園祭での告白

俺と憂と鈴木と小雪とでけいおん部の演奏を聞いていると、扉が勢い良く開けられ、そこにいたのは雪那だった。そして、雪那は壇上にあがり、中野に白いヴェールと指輪をつけ、そして、言った。

雪那「梓、合宿の時の答えいいか。」

梓「う、うん」

雪那「俺は梓のこと大好きだ。どんな誰よりも一番好きだ。俺と一緒にいてくれないか？」

中野は顔を真赤にしながら、首を縦に振った。そして、中野を連れだしてどこかへ行ったのだった。

その後、唯姉さんたちと一緒に消えた二人を探すことになった。理由は澪先輩が……

澪「あの二人をほつといたら……まだ早いぞ二人とも」

何故かテンパッていて、二人を探す羽目に、俺は憂と一緒に学校内を探すことに、鈴木と小雪ちゃんは校外を、先輩たちは校庭などを探すことに……

霧夜「それにしても、あの二人というか、雪那の奴。やっと告白し

たか

憂「すごいよね。皆が見てる前で告白なんて」

霧夜「問題になったりしないよな」

憂「和さんがいるから大丈夫だよ」

霧夜「それと、さわ子先生な。あの人だったら絶対に何とかしそうだな」

憂「うん、」

とりあえず、俺達は使われてない教室を探していた。虱潰しに探していると言室にたどり着いた。

憂「ここにいるかな？」

霧夜「いたらどうする？」

憂「どうするって」

霧夜「開けた瞬間キスしていたりとか」

憂「それだったら気まずいね」

霧夜「ああ、」

そっと、扉を開き、隙間から覗いてみると……一人は壁にもたれかかって眠っていた。

霧夜「幸せそうに眠ってやがって」

憂「見て、手をつないで寝てるよ」

霧夜「とりあえず、皆に連絡するか、しばらく邪魔をしないように
つて」

憂「そうだね。」

メールでみんなに連絡をし、俺と憂は屋上にいた。

霧夜「何で屋上になんか来たんだ？」

憂「ん、夕日が見たくって」

時間的にはもう夕方、太陽が赤くなっている時だ。

憂「ねえ、私達もあんな風に喧嘩したりするのかな？」

霧夜「どうだろうな。今のところ喧嘩とかしてないけど、」

憂「そうだけど、私達もあんなふうに喧嘩したら仲直りできるかな
つて」

霧夜「……」

俺は黙って、憂の頭を撫でた。

霧夜「大丈夫だ。俺達もあいつらみたいに仲直りができるさ」

俺の言葉を聞いて、憂は笑顔で……

憂「うん」

第11話 学園祭の告白（後書き）

六甲水「学園祭終了と雪那と梓が仲直り」

雪那「それで、次は？」

六甲水「おや、早いね」

雪那「これ以上あのことを掘り返されるのはちょっと……」

六甲水「まあ、いいや。今回はクリスマス会」

第12話 クリスマス会 その1（前書き）

六甲水「今回は1年生組で、クリスマス会です」

霧夜「なんか嫌な予感が……」

雪那「あの作者、このまえ、SUN先生の感想の時に変なことを言
つてなかったか？」

小雪「本当に楽しみだね」

六甲水「そうだな」

霧夜&雪那「何をされるんだ？」

第12話 クリスマス会 その1

第12話 クリスマス会 その1

憂 side

こんにちわ、平沢憂です。今日、12月25日。クリスマスに梓ちゃんの家でクリスマスパーティーをやることになりました。お姉ちゃんたちは私の家でやるみたいで、今回は別々にやります

私は梓ちゃんの家に着き、インターホンを押すと、梓ちゃんが出てきた。

梓「こんにちわ、憂。」

憂「こんにちわ、梓ちゃん。お邪魔します」

梓ちゃんの部屋に入ると中には小雪ちゃんと純ちゃんがいた。

小雪「あっ、こんにちわ。憂姉」

憂「小雪ちゃんも来たんだ。」

小雪「うん、雪兄にくっついて来たんだ」

梓「でも、二人とも、全然働いてくれないんだもん。」

純「私と小雪ちゃんは楽しむ側だもん」

小雪「そうそう、」

憂「そうなんだ。所で、霧夜くんたちは？」

梓「ん、買出しってもらってる。心ちゃんたちは遅れて来るって、」

純「じゃ、男子がいない間に……」

小雪「そうだね。」

二人が荷物を漁り、出てきたのは……サンタ服だった。

梓「そ、そんなものどこで……」

純「山中先生にクリスマス会やるって言ったら、貸してくれたの」

小雪「さてと、着替えようか。」

霧夜 side

俺と雪那と義亮とで買出しに行った帰りだった。

雪那「いっぱい買ったな」

義亮「買い忘れたものとか無いよな」

霧夜「ああ、ちゃんとメモを見て買ってきたからな。」

義亮「というか、お前ら二人彼女持ちか。羨ましい」

霧夜「ん、純がいるだろ。」

雪那「結構仲がいいしな。お前ら」

義亮「あれは友達としてだ。」

霧夜「本当か？」

雪那「おっ、着いた」

梓の家に着き、インターホンを押したが誰もでなかった。

霧夜「さきに始めてるのか？」

雪那「そうかもな。鍵も開いてるし、勝手に入るか」

義亮「じゃあ、俺はこの荷物台所に運んでおくよ」

霧夜「じゃあ、俺達は部屋に戻るか」

雪那「だな、」

荷物を義亮に任せ、梓の部屋に二人で一緒に入ると、サンタ服に着替え中の憂と中野がいた。

雪那「……………」

霧夜「……………」

あれ？この展開どこかで、もしかして、あの作者……マジでやりやがったな

憂と中野はただ顔を真赤にしているだけだった。

雪那と俺は黙って、扉を閉じ、ただ呆然としていた。

義亮「なにしてるんだ？お前ら」

しばらくして、義亮とサンタ服を着た鈴木と小雪ちゃんがいた。

小雪「どうしたの？二人とも」

純「顔が真っ赤だけど、」

雪那&霧夜「気にしないでください」

第12話 クリスマス会 その1（後書き）

六甲水「いやー、いいネタがあつてよかった」

雪那&霧夜「マジでやるなよ。糞作者あああああああああ」

六甲水「何だよ。折角着替えシーンが見れたのに」

小雪「本当だよ。」

義亮「大変だな。お前ら」

霧夜「義亮はどうだったんだ？」

義亮「ん、俺は台所に行ったら、サンタ服の純と小雪ちゃんが準備してたから、」

六甲水「よかったね。二人とも」

雪那「マジでこの作者やだ」

霧夜「とりあえず、他の人達にボコられないうちに、戦う準備を…」

第13話 クリスマス会 その2（前書き）

六甲水「はあ、」

雪那「はあ、」

霧夜「はあ、」

小雪「どうしたの三人とも。溜息ついて」

六甲水「専門学校の実習が近くて、マジでめんどい」

雪那「どっかのバカ作者が着替えを覗くことやりやがって」

霧夜「マジで、この後どうする気だよ」

小雪「アホな三人だ」

第13話 クリスマス会 その2

第13話 クリスマス会 その2

着替えを目撃して、数十分後、中野の部屋に入ってパーティーが始まったが……気まずい。だって、ずっと、憂の奴顔を真赤にしてるんだもん。どうしよう。そうだ、雪那と中野は……

雪那「所で、梓。」

梓「何？」

雪那「その格好。寒くないのか？」

梓「部屋に暖房がついてるから平気だけど、廊下とか出ると結構寒いよ」

雪那「あんま、風邪とかひくなよ」

梓「ひいたら、ゆきが付きつきりで見病してくれる？」

雪那「ああ、お前の風邪が治るまでな」

梓「嬉しい」

なんてこった。何だあのラブラブ空間は、何、クリスマスであるの二人のテンションが上がりまくってるのか。どんだけだよ。

義亮「そういえば、他のヤツら、遅いな。」

純「さっきメール来たんだけど、迷ってるんだって、」

梓「じゃあ、迎えに行つてこようか？」

義亮「俺が行つてくるよ。」

純「じゃあ、私も……」

そう言い残し、二人は部屋を出て行つた。何だ、何であの二人が一緒に……これがクリスマスのか？

小雪「憂姉、このジュースおいしいよ」

憂「えっ、有難うね。小雪ちゃん。」

小雪ちゃんが渡してきたジュースを受け取つた憂。憂はジュースを飲むと何だかだんだんと顔が赤くなつてきていた。それに気づいた雪那が

雪那「こゆ、お前、憂に何を飲ませた」

小雪「ん、ウイスキーをアップルジュースで少し割つたやつだよ。」

梓「そんなものの憂に飲ませないでよ。というか、よく買えたね」

小雪「家にあつたやつを持ってきたからね。」

霧夜「お前、何やってるんだよ」

憂「うーん、何だか暑くなってきた、服脱ぐ」

そう言っつて、憂はサンタ服を脱ごうとした。俺達は必死になって憂が脱ごうとするのを阻止することになった。

憂はそのまま寝てしまい、俺は憂の事を思い、クリスマス会を抜けだして、憂をおんぶして帰ることになった。

霧夜「たく、変なものを飲ませて……」

ふっと、上から雪が降ってきた。

霧夜「ホワイトクリスマスか」

こういつのもいいな。

第13話 クリスマス会 その2（後書き）

六甲水「以上が、クリスマス会でした。所で、霧夜くん。」

霧夜「なんだよ。」

六甲水「憂のサンタ服どうだった？」

霧夜「い、いや、可愛かったけど、それで、何だその写真？」

六甲水「このサンタ服の憂ちゃんの写真（撮影者小雪）をいくらで買います？」

霧夜「いやいや、だったら、雪那だって買う要素が、どうせ、中野の写真があるはずだ」

六甲水「すでに携帯で取ったからいらないうって」

霧夜「いくらだ。」

六甲水「5000円」

梓「あの二人何してるの？」

雪那「見てやるな。とりあえず今回は、正月だな」

梓「次回もお楽しみに」

第14話 正月（前書き）

六甲水「今回はお正月です」

雪那「季節外れもいいところだけどな」

霧夜「確かに、」

小雪「まあ、前話とかがクリスマス会だったからね」

第14話 正月

第14話 正月

新年、平沢家で迎える初めての正月だった。リビングに行くとき、唯姉さんがこたつと同化していた。

霧夜「唯姉さん。何だかこたつと合体してるみたいだよ」

唯「あつ、おはよう。それとあけましておめでとう。」

霧夜「おはよう。それとおめでとう。」

唯「今日も寒いから、やつくんもこたつに入ったら?」

霧夜「どうせ、しばらくしたら初詣いくから早く準備しなきゃいけないからな」

憂「あ、おはよう。霧くん」

霧夜「おはよう。憂。すぐに準備するから」

憂「そんなに急がなくてもいいよ。」

唯「二人で初詣いくの?」

憂「ううん、雪那くん達と行くんだよ。お姉ちゃんも早く準備しないとダメだよ」

唯「うーん、私も一緒に行っていかな？どうせ、同じところだし」

憂「うん、いいよ。じゃあ、早く準備しちゃう」

唯「こたつから出たくないっす」

しばらくして、唯姉さんがこたつから引っ張り出して、待ち合わせしている場所へと向かった。

待ち合わせの場所に着くと、軽音部のメンバーと雪那と小雪ちゃんが待っていた。

律「おつ、憂ちゃんたちも来たんだ」

憂「元々、みんなで行こうって約束してましたから、」

霧夜「義亮とかは？」

雪那「義亮は寒いからやだって、葉渡と綺月は二人でもさきに済ませたんだって、純と光真は用事で来れないらしい」

小雪「折角こころちゃんに会いたかったのに……」

それにしても、琴吹先輩の晴れ着とか似合い過ぎたる。本当にお嬢様なんだな。

漣「私も来てくればよかったな」

梓「どうして来てこなかったんですか？」

漣「去年、律に思いつきりからかわれたからな。今年は着ないようにしたんだけど、」

律「梓とかも来てくればよかったのに、」

梓「私はいいです。昔七五三みたいだって言われたんで」

雪那「誰に言われたんだ？」

梓「……憶えてないんだ。」

雪那「？」

霧夜「憂とかも来てくればよかったのに」

憂「私とお姉ちゃんの晴れ着どっか行っちゃって、見せたかったな。霧くんに晴れ着姿」

霧夜「ん、そ、そうか」

律「あー、はいはい。そこラブらない」

律先輩の注意を受けて、とりあえず、みんなでお祈りをするに
……

霧夜（今年も何とか乗り越えられますように）

憂（みなさんが元気に過ごせますように）

律「さて、お祈りもすんだことだし、何しようっか」

紬「はい、折角だからみんなで晴れ着来てみない？」

漣「何でいきなり、」

紬「何となくよ。何となく。近くに私の家で経営してる着物のお店があるからそこに行きましょ、」

雪那「じゃあ、俺達は関係なさそうなんで帰ります。」

律「何言ってるんだ？男子二人には評価をつけてもらおうと思ってるんだから」

霧夜「まじかよ。」

小雪「じゃあ、心ちゃんたちも呼びますね」

第14話 正月（後書き）

六甲水「和服っていいよね」

霧夜「なんだいきなり、」

小雪「作者は和服好きなんだってさ」

雪那「だからか。」

霧夜「おい、作者。また除きネタとかやめろよ」

六甲水「やるわけ無いじゃん」

雪那&霧夜「心配だ」

六甲水「和服は半脱ぎが一番だ」

雪那&霧夜「絶対に何かやる気だ」

第15話 晴れ着品評会（前書き）

六甲水「今回は晴れ着の品評会です。そして、二人があるものを目撃」

雪那「マジで何されるんだよ」

霧夜「怖い」

第15話 晴れ着品評会

第15話 晴れ着品評会

初詣の帰り、琴吹先輩の提案でみんなで着物のお店に行き、晴れ着を着ることになり、俺達はその晴れ着の品評会をすることになった。

紬「それじゃあ、着付けお願いできないかしら」

琴吹先輩はお店の人に憂達の着付けを頼み、俺達にお茶を出してくれた。今、俺達はお店の広い部屋にいて椅子に座らされている。

霧夜「それにしても、琴吹先輩色んなお店やってますよね」

紬「私というより、お父様ですけど、それよりはいい、これ」

そういつて、渡されたのは1〜5まで書かれた棒だった。

紬「これで評価してもらうけど、あんまりひいきとかしちや駄目よ」

雪那「分かってますよ。そんな事しません。」

紬「じゃあ、私も着付けの方見てくるから」

しばらくして、葉渡と綺月がやってきた。何故か綺月も晴れ着だった。

心「やつほー、二人とも。」

郁斗「よくとまあ、こんな事やるな」

雪那「まあな。それにしても、何で綺月が女性ものの晴れ着を着てるんだよ」

心「だって、こういうの来てみたかったんだもん」

霧夜「とりあえず、座ったら、」

心「そうだね。」

すると、琴吹先輩が出てきて、綺月の隣りに座った。

紬「じゃあ、最初に、リツちゃんね」

出てきたのは、黄色の色にひまわりの絵が描かれている晴れ着を着て、髪型は特に変わってない田井中先輩だった。何故か珍しく恥ずかしくしていた。

律「ううゝ、何か恥ずかしいな」

紬「じゃあ、点数は？」

全員が上げた棒は、俺が4点、雪那が4点、綺月が、3点、葉渡が、3点。結果が14点

律「ムギは審査しないのかよ。」

紬「私は司会と進行をやりたいの」

律「そうか」

続いて出てきたのは、漣先輩だった。やっぱり凄く恥ずかしそうにしている。漣先輩の晴れ着は、赤に桜の花が散りばめられているもので髪型はサイドテールだった。

漣「何で、わざわざ、私の家から持ってきたんだよ」

紬「折角だしね。それに漣ちゃんはこれの方がいいかなって」

点数は、俺が4点、雪那が4点、綺月と葉渡が5点の合計で、18点だった。

律「やっぱり、漣には適わないな」

漣「いや、律の方がに、似あうよ」

続いて出てきたのは、唯姉さんだった。唯姉さんの晴れ着はピンクに、梅の華が描かれている。髪型はいつもと変わらない。何故か嬉しそうにしていた。

唯「むぎちゃん。この晴れ着凄くいいよ」

紬「そう、よかった。」

点数は、俺が3点、雪那が4点、葉渡が4点、綺月が5点、合計で16点だった。すると、唯姉さんが嬉しそうに近づいてきた。

唯「ねえねえ、やつくん。似合う?」

霧夜「ま、まあ、似合うよ」

とりあえず、褒めておくことにした。続いて出てきたのは憂だった。憂の晴れ着は、オレンジに朝顔が描かれている晴れ着に髪型はいつものものだった。

憂「えへへ、可愛い。」

やばい、スンゴイ可愛い。点数は俺が5点、雪那が3点、綺月が3点、葉渡が2点だった。合計で、13点だった。

心「霧くん。ひいきしてない?」

霧夜「き、気のせいじゃないか?」

やばい、つい、最高点を上げてしまった。大丈夫だ。中野の時に雪那だって

紬「それじゃあ、次は小雪ちゃんね」

小雪「いえーい、どう?」

小雪ちゃんの晴れ着は、水色に雪の結晶が描かれている晴れ着に、何故か小雪ちゃんはいつも肩まである黒髪が、腰まであった。

律「どうしたんだ?その髪?」

小雪「えへへ、さっきお店の人にいったら、もらった。」

点数は、俺が4点、雪那と綺月と葉渡が3点で、合計で、13点だった。

小雪「うう、雪兄もうちよっと点数入れてもいいじゃん」

雪那「おれは甘くないからな」

紬「じゃあ、最後にあずさちゃんね」

最後に出てきた中野の晴れ着は、赤に梅の花が散りばめられている物に、髪はいつものツインテールだった。

梓「は、恥ずかしい」

点数は、俺が4点、綺月が4点、葉渡が5点、雪那は……………

霧夜「おまえ、2点って」

小雪「辛口すぎだよ」

雪那「ん、いや、俺はこうしたほうがもっと、」

そう言っつて、雪那は中野が付けている髪留めを取り、中野は溲先輩みたいな髪型になった。

雪那「晴れ着に似合うからな」

梓「あ、ありがとう」

こうして、晴れ着品評会は幕を閉じたのだった。結果は無かったこととなった。

第15話 晴れ着品評会（後書き）

六甲水「以上が晴れ着品評会でした。どうだった。二人とも」

霧夜「まあ、可愛かったけど、」

雪那「そうだな。」

小雪「ぶー、結局、何も無しに終わっちゃった」

梓「でも、晴れ着もらえたからいいじゃない」

憂「そうだよ。」

六甲水「次は、バレンタインデートです」

第16話 バレンタイン（前書き）

六甲水「今回バレンタインです。」

梓「私達のバレンタインの話は？」

六甲水「そのうち、短編とかで描くかも、それが、また新しい作品を」

第16話 バレンタイン

第16話 バレンタイン

2月14日。この日は女の子にとって大事な日でもある。そんなこの日、俺はあるものを待っていたそれは……………

義亮「はあ、バレンタインか。」

霧夜「何で、そんなに落ち込んでるんだよ。」

義亮「だってよ。バレンタインだぜ。まだ全然一個ももらってないぞ」

学校では少ない男子でも、少しだけみんなそわそわしている。それもそうだろう。女の子にとっても大事な日だけど、男にとっても大事な日でもあるんだから……

義亮「それにしても、お前や雪那はいいよ。」

霧夜「何で？」

義亮「だって、もらえる確率高いじゃん。くそ、羨ましい」

霧夜「まあ、そうだけど、」

義亮「もうもらったのか？」

霧夜「いやまだだ。」

そう、俺はまだ憂からチヨコを貰っていない。雪那はもう既に中野からチヨコを貰い、いちゃつきながら帰っていった。というか部活はいいのかよ。二人とも

義亮「まじかよ。まあどうせあとから貰うんだろ」

霧夜「多分な。」

義亮「じゃあ、俺は部活いくから」

霧夜「じゃあな」

義亮が部活に行き、俺も残っていてしょうが無いので、帰ることにした。

靴を履きかえ、昇降口から出る同時に寒さが襲った。

霧夜「まだ寒いな。あともう少し3月だっていうのに、」

ふっと、校門の方を見るとそこには、憂がいた。

憂「あつ、霧くん。」

霧夜「憂、お前、帰ったの結構前だったはずだけど、」

憂が教室を出たのが3時過ぎ、今は4時半。憂は一時間近く待っていたことになるんじゃない……

憂「霧くんのこと待ってたんだけど、霧くん出てくるの遅かったね」

霧夜「ああ、少し教室に残っていたからな」

憂「そうなんだ。ねえ、霧くん。目つぶって」

霧夜「へっ、どうしたんだ？いきなり」

憂「いいから」

憂に言われるまま、俺は目をつぶる。すると、唇に柔らかい感触が……とつさに目を開けると憂が顔を真赤にしていた。

霧夜「憂、今のは？」

憂「えへへ、バレンタインチョコだよ」

キスがバレンタインのチョコだとは、何か大胆のことをするな憂

第16話 バレンタイン（後書き）

六甲水「やばい、やばいよ。」

雪那「何が？」

六甲水「書いてて、恥ずかしくなってきた。うわ、マジで恥ずい」

梓「た、確かに、バレンタインのチョコがキスなんて……恥ずかしい」

雪那「よくこんなものを書いたな。」

六甲水「こつちだつて、恥ずかしいよ」

第17話 看病（前書き）

六甲水「今回は憂と霧夜が大変なことに……」

霧夜「何をさせられるんだ」

第17話 看病

第17話 看病

2月16日 水曜日、AM10:00 普段なら学校にいるはずの俺だったが、今は家にいる。その理由は、

憂「けほっ、けほっ、ごめんね。迷惑掛けて」

霧夜「全く、あんな寒空の中一時間も待ってるからだよ」

憂「だって、早くバレンタインのチョコあげたくって」

そう、家にいる理由は憂の看病のためだ。バレンタインの時に体を冷やしてしまい、憂は風邪を引いてしまったのだ。

憂「霧くん、学校は？」

霧夜「遅刻するって、連絡したから午後から行く。」

憂「私なら大丈夫だよ。だから……」

霧夜「大丈夫じゃない。ほっといたら無茶するからな。しっかり寝てろ」

憂「うう、お姉ちゃんは？」

霧夜「唯姉さんなら、学校に行ったよ。さすがに心配してたけど、」

憂「けほ、このままじゃ、霧くんは風邪移しちゃうよ。」

霧夜「憂の風邪ならいくらでも、」

憂「うう、よく平気でそんな事言えるね」

霧夜「お前こそ、普通にキスとかできるな」

憂「あれぐらい普通だよ。あの二人に比べたら……」

霧夜「まあな。」

しばらくして、憂は寝てしまったので俺は学校に行く準備をしている。すると、リビングの机の上にあるものを発見した。それは……

霧夜「封筒？誰のだ？」

気になって、開けてみるとそれは……ラブレターだった。それも憂か唯姉さんがもらった奴ではなく、憂が誰かにあげるために書いたものだった。

霧夜「一体、誰に……」

一気に頭が真っ白になった。憂とは恋人同士になってたはずなのに……こんなことが、もしかして、俺だけだったのか？恋人同士だっと思っていたのは？

憂「あれ？霧くんまだいたの」

後ろから憂の聲がした瞬間、俺はカバンや憂が書いたと思われるラブレターを家に置いて家から飛び出した。

霧夜「そんな、そんな、そんな」

第17話 看病（後書き）

六甲水「緊迫の次回、ラブレターの真意についてです。」

雪那「普通に憂がキリのこと裏切るはずないと思うぞ」

梓「うん、霧夜くんの勘違いだったりして、」

義亮「どうなんだかな」

六甲水「次回をお楽しみに」

第18話 恋文（前書き）

六甲水「多分、次か次ぐらいにこの物語は終わりです。」

雪那「まあ、澗編とか唯編とかあるしな」

六甲水「他の作品も進めなきゃいけないし、それに、また新梓編とか書きたいし、さらには別世界の梓編とかもね」

霧夜「マジで、結構作品書きすぎだろ」

六甲水「あと、コラボの奴もね早く書かなきゃ」

第18話 恋文

第18話 恋文

家を飛び出し、無我夢中で走る俺は何かにつまづいて転んでしまった。

霧夜「くそ、」

周りとかをよく見ると雪がかなり積もっていた。結構前から降っていたのだろう。俺は転んだ場所ですっと立っていた。

霧夜「何なんだよ。あのラブレターは……」

ずっと、あの手紙のことを考えながら走っていた。一体あの手紙はなんだったのか。

憂「霧くん」

とっさに後ろを振り向くとパジャマの上にコートを羽織り、髪の毛も解いたままの憂がいた。

憂「どうしたの？いきなり走っていちゃうなんて、カバンも持たずに」

霧夜「憂こそ、風邪引いてるのに……」

憂「だって、霧くんのこと心配だから、本当にどうしたの？」

霧夜「リビングにあった手紙って、あれ、憂が誰かにあげるラブレターなんだろ」

憂「手紙？もしかして、あの手紙読んじゃったの？」

霧夜「ああ、」

憂「あはは、あの手紙は霧くん宛だよ」

霧夜「へっ、」

憂「本当はバレンタインのチョコと一緒に渡そうと思ったんだけど、手紙だけが間に合わなかったから、あとで渡そうと思って置いていたんだから、宛先も霧くんって書いてあったはずだけど」

そういえば、宛先も見ないで手紙の内容だけ見てたから、全然気がつかなかった。もしかして、俺の勘違い？

憂「それにしても、いきなり、外出て行ったから、本当……」

憂はそのまま雪の上に倒れてしまった。俺は駆けつけて手を憂のオデコに当てると凄く熱かった。もしかして、まだ治りきってなかったせいで……くそ、早く病院に……

霧夜「憂、しっかりしろ」

早くどうにかしないと、そう思ったその時、

雪那「何、人の家の前で小芝居してるんだよ」

雪那がいた。

霧夜「雪那、あれ？ここお前の家の前？」

雪那「そうだよ。もう忘れたのか。ちなみに今日は雪が降ってきたから途中で学校が終わったんだよ。」

霧夜「そうだったのか、それより、憂が…」

雪那「とりあえず、小雪のベッドに寝かしておこうか。それにお前も」

霧夜「へっ」

雪那の家で憂を寝かしたあと、俺も熱を測ると7・5 もあった。憂の風邪がうつってしまったのだ。

雪那「とりあえず、唯先輩に今日は俺の家で泊まらせますっていつておくから」

霧夜「お前と小雪ちゃんは？」

雪那「唯先輩の家で泊まるよ。こゆの奴も迎えに行かないといけないし」

霧夜「ありがとな」

第18話 恋文（後書き）

六甲水「今回は、恋文の次の日の話、其の次は最終回です。」

雪那「プロローグの奴とかどうするんだ？」

六甲水「あれも、次回明かされます」

第19話 大切なもの（前書き）

六甲水「今回は、霧夜と憂の二人しか出ません」

小雪「私は？」

六甲水「小雪ちゃんは、短編集で活躍してるでしょ」

第19話 大切なもの

第19話 大切なもの

目覚めると見知らぬ部屋にいた。

霧夜「ここは……そうか、雪那の家か。」

そう、俺は昨日、急に風邪を引いてしまい、たまたま通りかかった雪那に助けってもらったのだ。そういえば……

霧夜「憂の奴大丈夫かな？」

憂は風邪を引いてる中、外に出てしまいそのまま、倒れてしまっていた。とりあえず、リビングに行くと、憂が楽しそうに料理をしていた。というか勝手に人の家の食材を使っていいのか？

憂「あつ、霧くん。起きたんだ。」

霧夜「お前、勝手に食材使っているのか？」

憂「さつき雪那くんから電話があつて、勝手に冷蔵庫の中身とか使っているって言われたんだ。」

霧夜「そうなんだ。」

憂はまた料理の準備をした。俺はそんな憂を見て、後ろから抱きしめた。

憂「え、え、霧くん」

霧夜「ごめん、ちょっとこうしていいかな。」

憂「う、うん。」

霧夜「何か、俺、大切な物を失うところだったかもしれない」

憂「えっ、」

霧夜「憂に無茶をさせて、ごめんな」

憂「ねえ、覚えてる。小さい頃のこと」

霧夜「小さい時のこと？」

憂「私がお母さんが大切にしていたものを壊しちゃって、泣いてる時にね。霧くんがかばってくれたんだよ」

霧夜「そういえば、そんな事もあったな。」

憂「あの時からかな。霧くんの事を意識したのは」

霧夜「そうだったのか。」

憂「ねえ、私は霧くんにとっての大切な人だよな。」

霧夜「ああ、」

憂「霧くんは私にとって大切な、大切な人だよ」

そう言っつて、憂は俺から離れ、もう一度近づき、キスをした。

雪那「は、」

小雪「どうしたの雪兄」

雪那「何か今家の中に入るのが気まずい感じがしてきた」

小雪「何で？」

雪那「それがわからない」

第19話 大切なもの（後書き）

六甲水「終始ラブラブだったな」

雪那「結局、俺達の出番が合ったな」

小雪「そうだね。」

雪那「所で、次回で最終回か？」

六甲水「そうだよ。次回で霧憂編は終わって、あとは唯編と遷編と新梓編だよ。」

小雪「頑張って」

最終話 これからも二人で（前書き）

六甲水「今回で、霧憂編、最終回です。」

小雪「今回で最終回なんだ。」

六甲水「何か、梓編以上に長かったな」

最終話 これからも二人で

最終話 これからも二人で

春休みのある日、俺と憂と一緒に家でのんびりした。

霧夜「暖かいな」

憂「そうだね、春休み終わったら、もう私達2年生だよ」

俺はソファーに横たわり、憂はのんびりと紅茶を飲みながら話していた。唯姉さんは澁さん達と一緒に出かけている。今は家の中には俺達の二人しかいない

霧夜「もうか、時間が経つのが早いな。憂と唯姉さんと再会してから、もうそんなに経つんだ」

憂「この一年間いろいろあったね。雪那さんと梓ちゃんとすぐに仲良くなったし、」

霧夜「高校最初の友達だからな。あいつは、あいつも色々大変だったよな」

憂「うん、学祭での告白は凄かったよな」

霧夜「案外、伝説の告白の仕方って、伝わるんだろうな」

憂「あはは、そうだね。霧くんも雪那くんみたいに告白してくれた

らしいのに。」

霧夜「告白はお前からだったからな」

憂「そうだったけ、」

霧夜「そうだよ。多分、」

憂「本当かな。でも、今はこうして二人でいられるからいいよね」

霧夜「そうだな。」

憂は立ち上がり、俺の上に乗ってきた。そこまで重くはないが、胸があたって結構恥ずかしい

霧夜「どうしたんだ？」

憂「えへへ、たまにはこうしてみたくって、」

霧夜「子供か。でも、こういう時間もいいな」

憂「ずっとこういう時間があるのかな？お姉ちゃんがいるときはそんな事出来ないし、」

霧夜「……結婚すればずっと二人っきりの時間ができるけどな」

憂「えっ、」

あれ？俺は思わず変なこと言ったか。まあ、こんな陽気で変なこと言っちゃうかもな。なので、俺は意識せずに言った。

霧夜「雪那と中野も、いわゆる婚約者同士だし、いずれは結婚するんだ。だったら、俺達も結婚しよう」

憂はただただ、顔を真赤にしていた。だけど、嬉しそうだった。

憂「うん、結婚しよう。指輪も何もいらなから私は、ただ、」

霧夜「ただ？」

憂「二人でこうして居られる時間が、私達の婚約の証だよ」

霧夜「そうだな。」

俺は、憂と唇を重ねた。そして、思った。ずっとこうしていたいと

最終話 これからも二人で（後書き）

六甲水「以上が霧憂編の最終回でした。」

雪那「結構いちゃついていたな」

梓「そうだね、」

六甲水「まあ、お二人はこれからが忙しいからね」

雪那「どういうことだ？」

六甲水「新作が始まるからだよ。新梓編」

梓「そうなの」

六甲水「まあ、明日ぐらいに上がるから、」

雪那「作者、書きすぎ」

これまで、応援してくれてありがとうございました。まだ連載している唯編と遷編、そして、新梓編が始まります。どうぞ、そちらも見てください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9615n/>

けいおん IFストーリー 霧と憂の恋物語

2010年10月10日07時06分発行